

2021年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第二十主日(10/3)礼拝説教
「死を超えた命の旅 I」ルカ第 24 章 13 節から 32 節

2021/10/3 渡邊洋子

【聖書】

ルカによる福音書 **24:13** ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、**14** この一切の出来事について話し合っていた。**15** 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。**16** しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。**17** イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。**18** その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけのご存じなかったのですか。」**19** イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。**20** それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。**21** わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。**22** ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、**23** 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。**24** 仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」**25** そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、**26** メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」**27** そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。**29** 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。**30** 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。**31** すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。**32** 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

1 エマオへの途上の物語

今日の聖書テキストは、新約聖書の中でも指折りの美しい物語として、多くのキリスト者に愛されてきました。皆さんもよくご存じでしょう。沢山の絵が描かれ、詩にも歌われています。今日の物語がこれほど愛されてきたのは、15節のゆえではないかと思います。「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」福音書をまとめたルカは、この一文を深い想いを持って記したことでしょう。そうとは気づかぬままにキリスト・イエスと共に行く旅。ある説教者は、詩人、島崎光正の詩を引用します。これは前にも紹介した詩です。

「エマオの村に向かう
足の重い二人の弟子に
復活のイエスは加わった。
それとは知れず
互いに
話はアネモネの花のように心弾み、
虫ばまれた丸木橋の上では
イエスが一番先に渡り
また三人で並んで旅を行った。」

アネモネは復活の命の象徴、虫食まれた丸木橋は、死の象徴。死の象徴であるグラグラする丸木橋も主イエスが先に渡ってくださったから、続く二人は落ちることなく渡り、三人で先に進むことができる。道の傍らでは、そよ風に揺れて微笑んでいるようなアネモネの花。それは「死を超えた命の旅」。ここには、甦りの主イエスと共に死を超える命の旅へと踏み出した二人の人の姿が描かれています。

しかし、この物語の美しさは、おとぎ話の美しさではありません。信仰者の現実と課題、私達にも共通する課題が描かれています。いったいどのような課題でしょうか。「主イエスが真実に甦られ、今も生きて働いておられる、と確信できない」という課題ではないでしょうか。ルカの教会がどのような教会であるか、実際には殆ど分かっていませんが、聖書テキストの科学的研究が進み、分かって来たのは、ルカ福音書はだいたい紀元後80年から90年前後に書かれたのではないかと。それは、どういう時代かと言うと、教会の中で甦りのイエス・キリストと直接出会った人々の大半が召されて、直接には主イエスを知らない人々が大多数となった頃、世代交代の時代です。復活の主イエスに会った事がない人々が、どのようにして、甦りのキリスト・イエスへの信仰に生きるようになったのか、その経験がこの物語に投射している、と言

ってよいのではないのでしょうか。信仰者を生かす非常に重要なことがここに描かれているのです。だから、代々の教会はこの物語を愛するだけでなく、この物語に学び続けました。「ああ、主イエスは本当に復活して生きて働いておられる」と確信する喜びに教会は活かされてきました。私達も、今週と来週の二週にわたって、この物語を味わい、学び、喜びたいと思います。

2 暗い心の理由

二人の弟子はエルサレムを後にして、60スタディオン、11キロ半離れたエマオ村へと向かっていました。エマオの正確な位置は分かっていませんが、エルサレムから北西に延びる街道沿いの村だと言われています。その街道を歩きながら、二人の弟子は議論に熱中していたようです。一人の男が二人に追いつき、肩を並べて歩き始めたのに気づかないほどでした。見知らぬ旅人は彼らに話しかけます。「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」。その声を聞いて二人は、「暗い顔をして立ち止まった」とルカは印象的に語ります。「暗い顔」は陰鬱な顔、悲しそうな顔、沈んだ顔と訳される言葉です。クレオパという名の弟子は内心苛立ったのか、皮肉交じりに答えます。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけではご存じなかったのですか。」まるで「エルサレムに滞在しながら、ここ数日、あそこで起こった事を知らないのは、あなたぐらいだ、どれだけ愚かで鈍感なのか」という心の声が聞こえてきそうです。しかし、何とも皮肉な事ですが、エルサレムで起こったあの出来事を真実に知っていたのは、彼らの目の前にいる方だけ。でも二人はそれに気付かない。ここ数日の悲劇で彼らは深く失望し、心が疲れ切っていたからでしょう。絶望しかけていたからでしょう。

彼らは何に絶望していたのでしょうか、19節から21節に描かれています。神の御前にも人にも、力溢れる言葉を語り、偉大な業を行った預言者であるイエスさま。「イスラエルを救えるとしたらこの人しかいない」多くの人々がイエス様に望みをかけていた、なのに、指導者達は、悪たくみをし、イエスを逮捕してローマ軍に引き渡して十字架で殺させました。二人は、自分達の指導者に深く絶望しているようです。しかし、彼らが本当にかっかりしていたのは、神についてではなかったのでしょうか。神にはユダヤ人権力者達の心を変える力はないのか、神は何故、偉大なる預言者・ナザレ人イエスを見殺しになさったのか。二人の心は、神への信頼を失い揺れ動いていたのではないのでしょうか。だから、イエスの十字架の死から三日目の朝に、女達の証言、天使が現れて「イエスは生きておられる」と告げた、という話しを聞いても、信じる事ができませんでした。

そして、この神から離れる暗い心、不安な心は、私達にも覚えがあるものではないでしょうか。私達の人生の旅路には、耐えがたいと思われる苦しみがあります。「一体、こんなことがあっていいのだろうか、神はどこにおられるのか」と叫ばずにはいられない事も起こります。やがて「神には現実を変える力などないじゃないか」と背を向けることもあります。ですが、神に背を向けた時、私達信仰者に宿っていた光は消えます。神に造られ愛されてある自分を見失います。信仰者の目は光を失い、目が遮られ、甦りの主イエスが目の前におられても見る事ができない。

そして、神を見失った暗さにある時、聖書の言葉も、私達の脇を素通りしていきます。聖書が、少しも自分に関係するものではないように思えるのです。暗い顔をした弟子達の姿は、イエスも聖書の言葉も悟ることのできない、試練の中で神を見失う私達です。

3 聖書を解き明かすイエス

しかし、甦りの主イエスは、神に背を向け神とは関係ない所へと戻ろうとする情けない弟子達を追いかけ、一緒に肩を並べて歩いてくださいます。そして主イエスは、彼らを叱りつけます。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち！」(25節)。「物分かりが悪く」と新共同訳は遠まわしに訳していますが、英語版の聖書では、「O foolish men」と訳しているものもあります。「なんという馬鹿者なのか！」とイエスは叱っておられる。なかなか辛辣な言葉です。しかし、二人は、見ず知らずの旅人から「馬鹿者」と言われたにも拘わらず怒りだした形跡はありません。それどころか、見知らぬ人の言葉に、全身を向けて聞き入っているようです。この旅人の叱責の言葉には、軽蔑、侮蔑など微塵も感じられず、彼らを深く愛する思いが現れていたのでしょう。

見知らぬ旅人は続けます。「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」苦しみとは主イエスのご受難、十二人のうちの一人イスカリオテのユダに裏切られユダヤ人権力者達の企みによって逮捕され二人もしっかりと目にした凄惨極まりない十字架に架かって死に、葬られたこと。その非業の死を通らなければ、救い主は栄光へと入ることはできない。この「救い主の栄光」とは、永遠の命に甦り、天の父なる御神のみもとへと上げられること。十字架に無残に死んだナザレ人イエスこそ、正真正銘のメシア、キリストだと見知らぬ人は語ります。

そして、「モーセとすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された。」ここの「聖書全体」というのは、

私達の言葉では「旧約聖書」です。この当時、まだ新約聖書はできていなかったの、聖書と言えば旧約聖書のことでした。そして「説明する」と訳されている言葉は、興味深い言葉で二つの意味があります。「隠されていたものを明らかにする」という意味と「翻訳する」という意味です。旧約聖書に既にメシア、救い主が描かれている、と主イエスが、ご自身の言葉で説き明かされます。

この事をカール・バルトという神学者は、「旧約聖書全体がイエス・キリストを指し示している。神と民の間にキリストがない、というキリストの不在をもって、イエス・キリストを指し示している」。旧約聖書の中で、キリスト・イエスは、直接的には出てきません。しかし、「救い主がない」という現実の悲惨さと、神は預言者を通じてメシア、キリストを与える約束、そこに生まれる待望が旧約聖書には描かれています。ですから、旧約聖書では、背き続ける人間に対し、義と愛で臨む御神の内に、まことの人・まことの神なるイエス・キリストの存在は隠されている、と言ってよいでしょう。

この旧約聖書では隠されている天の御神の救いの計画を、甦りの主イエスは、二人の弟子に分かるように話しました。旧約聖書という言葉が彼らに向けた言葉としてお語りになった。神は永遠の昔にキリストによる救いのご計画を立てておられた、神に背き、自分達を神として生きようとする人間一人一人を、御子の命を代償として赦し、滅びから救おうと決心された。聖書には、遥かに遠い昔から、今を生きるあなたを目指し今を生きるあなたを呑み込んでいく命への言葉が語られている、死ぬべきあなたが、永遠の命に呑み込まれる為に神がご計画されたことが描かれている、と、主イエスは二人に語られたのではないのでしょうか。

だから、復活の主イエスが聖書を解き明かす時、聖書という言葉は他人事ではなくなります。自分に語りかけられている言葉として、私達の内響き始めるのです。その時、今日の交読文にもあるように、「み言葉がうち開き、神の光を放つ」という神の出来事が起こります。

4 ローズンゲン

その証のような聖書日課があります。290年間続いているドイツ・ヘルンフート兄弟団が発行する聖書日課、ローズンゲンです。私自身、ローズンゲンで家庭礼拝するようになって10年あまりですが、何度もローズンゲンにあった聖書言葉に、神を示されましたし、確実に変えられてきたと思います。状況に振り回され、神を見失いそうになった時には、「この愚か者！」と叱責されましたし、傷つき失望して神に助けを求めている時は、慰められ、励まされ

ました。それまでは想いもしなかった全く新しいことに気づかせてもらった聖書の言葉もありました。その度にいつも思うことは、「ああ、本当にイエス・キリストは甦られ、生きておられる」という事。イエス・キリストが十字架の死を耐え抜いたからこそ、私の罪は赦されている。だが、主は死んだままではなく、私の傍らで生きて働いておられる。そうでなければ、罪ある者が、このように時に適った神の言葉を聞くことができる筈がないからです。有名無名の実に多くのキリスト者達が、ローズンゲンを通して示される聖書の言葉によって、甦りのキリストの力のうちに、死を超える命の旅を続けてきました。それは、今日のエマオへの道にあった二人の弟子達の姿そのものです。

このローズンゲンとは「合言葉」や「くじ」という意味があります。この聖書日課の始まりは、ヘルンフト兄弟団の中に不和が起きた時でした。堅いわだかまりの心を抱いたまま、祈るために礼拝堂に集められた兄弟姉妹たち。彼らは、甦りのイエス・キリストの導きによって、自分達を一つにするのは、教団の指導者の言葉でも、歴史上の優れた人の言葉でもない、聖書の言葉以外にあり得ないことを再認識します。それと共に、自分達の想いで目が眩まされないように、神が今、自分達に与えるみ言葉を知りたい、と言う願いをこめて、誰かが選ぶのではなく、聖書の言葉をくじで選んで、その日の聖句としたのが始まりでした。やがてくじで選ばれた日々の聖句、ローズンゲンは、ヘルンフト兄弟団という教団や教派の枠を超えてドイツ国内に広まり、ヨーロッパに、アメリカに、そして世界中に広がっていきました。多くの信仰者が、このローズンゲンから、死を超える命の旅を共にしてくださっている救い主イエスを示され、変えられて行きます。そして死を超えた命への旅路を歩んでいきました。エマオ村に向かう街道で、二人の弟子に起こりつつあった事は、2000年の間、代々の教会で起こり続け、今の私達にも起こっています。

5 祈りつつみ言葉に聴く

ヘルンフト兄弟団が、「くじ」でその日の聖句を決める、というのはとても意義深いことだと思います。人間が聞きたい言葉を聞くのではない、神が与えてくださる言葉を聞くのです。甦りの主によって与えられる聖書の言葉に導かれる命の旅。その旅の主導権は、私達人間にはありません。旅の主導権は、甦りの主キリスト・イエスにあります。それは、30節から31節「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」から判ります。永遠の命への旅を共にして下さる主イエスですが、このお方は、子なる御神であり、私達人間が思い通りにはできる方でも、

コントロールできる方でもありません、その場につなぎとめておける方ではないのです。死を超えた命の旅は、主イエスが私達を導いていかれるのであって、私達が主イエスを好き勝手に引き回すではありません。だからこそ、私達が主イエス・キリストを自分の救い主として、この方から聖書の御言葉を聴きたいと願う時、私達は祈らざるを得ません。甦りの主に「今の私に必要なみ言葉をお与えください、お聴かせください」、心を込めて切に願う時、必ず、今の自分に必要な最適なみ言葉が与えられます。「すぐに」ではないかもしれませんが、しかし、祈り続ければ必ず与えられます。そして今、生きて働くキリストの臨在を確かに心に刻むこととなるのです。聖書を説き明かしつつ共に歩いてくださる救い主の物語は、私達をみ言葉を求めて祈る者へと変えてくれます。

この事を想う時、故・藤井兄の聖書を思い出します。几帳面にまっすぐな線が至ところに引かれた聖書。特にイザヤ書53章などは、すべての節に傍線が引かれていました。それを眺めていると、神に深く額づき導きを祈りつつ、聖書を開いた、そして、これは他ならぬ今、呻き苦しみ道に迷う自分に対する神の言葉だと受け止め、一字一句、心に刻みたい、と線を引いていった兄の姿が目に見えかかってくる思いがします。皆さんもご存じのように藤井兄の半生は、難病との闘いでした、仕事もやめねばなりませんでした、「どうしてこんなことに」と何度思ったことでしょう。時には神の力を信じ抜くことができず、御前を彷徨い出て罪を犯した事もあった。ですが、そんな兄弟を、甦りの主キリスト・イエスは追いかけて、共に並んで聖書を解き明かして下さった。だから、藤井兄はイエスの十字架を自分に向けられた神の義なる愛として受け留め悔い改め、祈りつつ聖書の御言葉に聴き、主イエスと共に死を超える旅を歩み続けました、そして今、神の御許で眠りについておられます。

祈りつつ聖書の御言葉を受け取りながら、死を超える命の旅を甦りの主イエス・キリストと共に喜び歩みたい。「ああ、まことに主イエス・キリストは、この私のために十字架の死を忍び、甦って生きて働いておられる」と実感する喜びの一步を重ねていきたい。それは一人だけの歩みではありません、クレオパが一人でなかったように。教会の仲間と共に、主イエスとともに、信仰の仲間と共に死を超える命の旅路の一步一步を重ねていきたい、と心より願います。

祈ります。